九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中華民国期蘇州における都市改造と住宅地開発に関する研究

箕浦, 永子
九州大学大学院人間環境学府都市共生デザイン専攻

https://hdl.handle.net/2324/7174523

出版情報：Journal of the City Planning Institute of Japan. 43.3, pp.151-156, 2008-10-25. The City Planning Institute of Japan
バージョン：
権利関係：© (c) The City Planning Institute of Japan. All Rights Reserved.

KYUSHU UNIVERSITY

26. 中華民国期蘇州における都市改造と住宅地開発に関する研究

Study on Reconstruction of Urban Space and Development of Residential Area about Suzhou, Modern Times

箕浦 永子
Eiko Minoura

This paper is the study about city planning history in China, Modern Times. In particular, this paper aims to describe the process of reconstruction of urban space and development of residential area about Suzhou, Zhonghua Minguo period. The government led to form new city by modern city planning in 1920's. The government of Suzhou did legislate new urban planning in 1927. The results are as follows. 1) They did execute the widening of existent roads, and the building of the new roads. 2) They did build new parks and new markets. 3) There were improved old canals and old houses. 4) The central area became the public space such as a park, the school. 5) The residential area was developed by individual, bank, investor and etc. This study analyzed one facet of the Chinese city planning history, modern times.
Keywords: Reconstruction of Urban Space, Development of Residential Area, Modern City, Urban Regeneration
都市改造，住宅地開発，近代都市，都市再生

1 はじめに

近現代の中国に関する都市計画史研究は，上海・天津などの租界都市や旧満州・香港などの植民都市に関する研究が盛んに行われてきた(1)。このような，近代都市計画が大規模に展開された都市がある一方で，緩やかに近代化が進んだ他の伝統的な都市についてはあまり検討されていない。そこで本稿では，むしろ多数派を占める伝統都市が近代都市へと変容する過程を明らかにすることを研究目的とする。そこには，例えば上海のように華やかで劇的な近代化ではないものの，現実に抱える都市問題の解決をふまえた都市改造・都市再生を模索する苦心が見受けられる。

研究対象には，江南都市の蘇州を取り上げる。蘇州は，中国の伝統的な都市形成の理念を基盤に，明清代には商業・文化が成熟する過程で西側が発展し，官衙も西へ移動したため中心性が喪失した都市形態であるのが前近代までの特徴である。蘇州に関する先行研究では，水路や庭園をキーワードとする研究が多く，近代都市として考察する研究はほとんど見当たらない。研究方法としては，まず政府主導の都市改造計画について中華民国（以下，「民国」と略記）期の関係史料より考察する。次に，民国期蘇州の「市中心区」と設定された地区の空間構造について，文字・地図史料および現地調査から分析し，復原的に考察する。さらに，一方で実施されていた民間による住宅地開発について，現地調査と関係史料より明らかにしていく。この一連の作業より，見過ごされがちな伝統都市の近代化の具体像に迫り，中国近代都市計画史の一側面を明らかにしたい。

2 本稿に資する蘇州の歴史的概要

（1）前近代の都市形成に関する概要

現在の蘇州の位置に都市が形成されたのは，呉闔廬(こうろ)1（前514）年に呉国の王の命を受けて伍子胥が築城を開始したのが起源とされる。伝統中国の都市計画は，漢の武帝（前141～前87年）の頃にまとめられたという『周礼』「考工記」(2)を規範とするが，年代差により築城時はこれに則していないことがわかる。当初どのような都市構造であったかは史料的限界によって未だ不明瞭であるが，先行研究によると，唐代中期までの蘇州は正方形であり，唐末に北部と西部が拡張されたということが明らかとなっている(3)。

その後，南宋建炎 4（1130）年には金が蘇州に侵攻して都市を破壊し，南宋嘉定 16（1223）年までに大規模な修復が行われた。蘇州の最も有名な都市図『平江図』（南宋紹定 6（1229）年）に描かれる都市構造は，唐末の改造と後の戦災復興によって形成された姿である。この城壁の骨格は現在もなお残っているため，明清代に骨格を変えるほどの大規模な都市改造は行われていないと考えられている。

また，『平江図』でも見受けられるように，宋代には城内の西側が先行して開発されており，清代になって東側の開発が進んでいった。城内の南端は水はけが悪いため大規模な開発は建国後まで行われておらず，北端も清代には軍隊の練習場が設けられたものの，ほとんどは開発されず空地が多かったと推定される。以上のような前近代の経緯を背景に，民国期の都市改造が計画される。

（2）近現代の社会変動と都市空間に関する概要

清道光 22（1842）年，アヘン戦争の終結により近代を迎え，蘇州は江南随一の都市の座を上海に奪われていく。さらに，清末の咸豊 10（1860）年に太平天国軍が侵攻し，城内は壊滅的な被害を被った。蘇州府城内に懸を置く呉懸・長洲懸・元和懸の人口推移を見ると，道光 10（1830）年に戸籍数が 1,970,468 であったのが，同治 4（1865）年には 612,363 と，実に 3 分の 1 にまで激減している(4)。城内の寺

正会員 九州大学大学院人間環境学府都市共生デザイン専攻 (Kyushu University)

廟を始めとする主な建物は焼き討ちに逢い，太平天国が滅びた同治3（1864）年以後，各所で再建工事が行われた(5)。

日清戦争の日本勝利で，光緒21（1895）年に下関条約が締結され，杭州・重慶・沙市とともに蘇州に日本の交易市場が設置される。場所選定の結果，城外南に40丈四方の正方形街区を構成する日本租界が，その東隣には主に英米が租借した公共租界が形成された。蘇州日本租界地は，民国32（1943）年に中国に返還されるまで設置された。

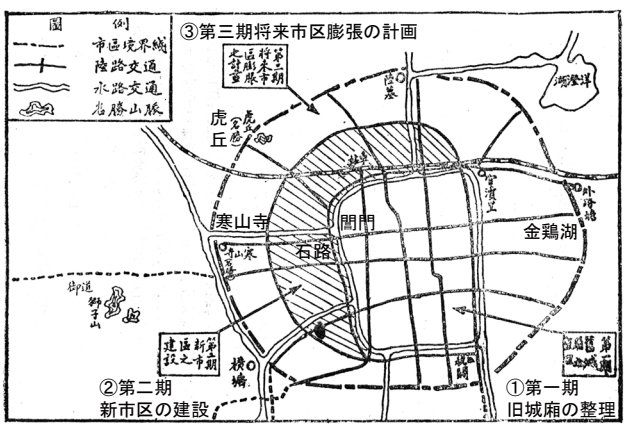
宣統3（1911）年の辛亥革命によって清朝が滅亡，民国1（1912）年に中華民国が誕生する。民国17（1928）年，国民党が正式に国民政府を樹立し，首都を南京とすると，蘇州から南京に移住する者も出てきた。1920年代末には，電気・郵便・電話・学校・銀行など公共施設が次々と設置され，近代的な社会基盤が整えられていく。国民党と共産党の国内紛争，日本の侵略など，極めて不安定な社会情勢のなか，新国家形成に力を注ぐ姿を窺い知ることができる。

3 政府主導の都市改造計画と実施状況

（1）1927年『蘇州工務計画構想』の内容と実施状況

国民政府が主導した「新市街地運動」は1920年代末に最高潮に達し，多くの都市で西洋の都市計画の手法が採り入れられた。蘇州でも国民政府の蘇州市政準備組織が『蘇州工務計画構想』（以下『工務計画』と略記）を計画し，民国16（1927）年に制定した(6)。これには江蘇公立蘇州工業専門学校を設立し建築学科の主任を務めた柳士英が携わった。

『工務計画』は，まず将来的に発展傾向のある地域を旧城外西部一体とすることを示している。そして，蘇州を大きく3つの区域に分け，3期に分けて都市改造を行うことを計画した（図−1）。第一期（①）は，衰退の一途を辿る旧城内の改造であり，道路・水路・建築物を整備し，公園・野菜市場・公衆便所などを新しく設置するという計画である。第二期（②）は，旧城西北にある閶門を中心に旧城外に向かって放射線状に道路を形成し，半円形状に新市街地を形成するというものである。第三期（③）は，新旧市街地を中心として外側に市街地を拡張させようとする将来構想であった。『工務計画』は，既に混沌とした状態にある旧城内を，古い体制が終わったこの機会に積極的に改造し，法律を制定して将来的な都市の悪化を防ぐことを目的とし，新市街地形成よりも旧城内の様々な問題を解決して都市基盤を整備することを最重要課題と位置づけたのである。



図−1 改造・開発の段階的計画(7)

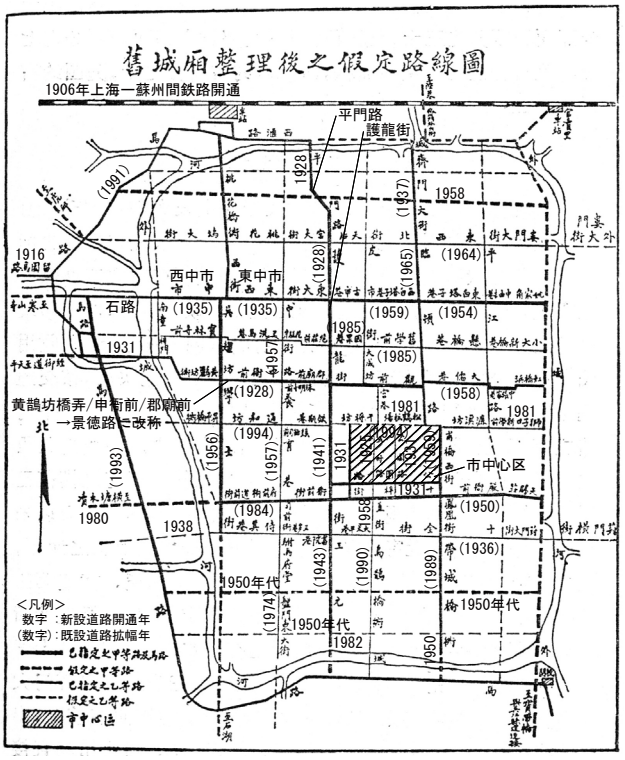
第一期の詳細は次項に譲るとして，第二期と第三期の計画が実現されるのは，かなり後のことである。第二期の区域の中心である閶門外の石路一帯は，既に清初には商業地区として発展しており，商店や商人の住宅，同郷・同業会館が多数建設されていた。しかし，咸豊10（1860）年の太平天国軍の侵入によって破壊され，後に民間の力で復興するも，民国26（1937）年の日中戦争時には日本軍による空爆の被害を受けた(8)。中華人民共和国建国後も社会主義政権下で開発は遅れ，『工務計画』が目指す新市街地形成が実現したのは文化大革命終了後の1978年以降となった。また，第三期の実現はさらに遅れ，1992年の社会主義市場経済の導入後となる。虎邱や寒山寺などの観光地の整備や，旧城外東の金鶏湖の西側に蘇州工業園区が開発されている。

（2）第一期計画の内容と実施状況

1) 道路

『舊城廂整理後之假定路線圖』（図−2，以下『仮定路線図』と略記）には，既に指定されている甲種道路（太実線）・乙種道路（細実線）と，今後実施予定の道路に指定した甲種道路（太波線）・乙種道路（細波線）が示されている。甲・乙種は道路の幅によるもので，甲10.8m・乙8m・丙6m・丁4mとなっている。道路計画は，既指定道路への整備や拡幅に関する計画と，新指定道路の新設計画がなされた。

各道路の履歴から実施状況を調べてみると(10)，民国期では「市中心区」内の道路新設，城内から鉄道駅に接続する平門路の新設と護龍街の拡幅，新市街地として設定された



図−2 道路計画と民国以降の実施状況(9)

石路へ向かう東中市と西中市の拡幅や景徳路[11]の整備・拡幅が実現されており，事例は少ないものの当初目的のうち最低限は達成されていると見ていいだろう。

特徴的なのは，その他の実施状況が1950年代と1980年代以降に集中しており，『工務計画』での改造方針が建国後も継承されている点である。建国後の1950年代前半は，第二次世界大戦や国内紛争で中止されていた工事の再開によるものである。1950年代後半は，1954年に『蘇州建設計画』が制定され，1956年に打ち出された草案をもとに1959年に制定された『蘇州都市計画』によるものであり，この時期は道路計画と実施が積極的に行われていたようである。1980年代は，主に路面を改造する工事が行われており，石畳からアスファルト，土からセメント板など道路規模によって改善が計られている。1990年代は，激増する車の使用の対策として，主に道路の拡幅工事が実施されている。

2) 水路

水路に関しては，飲用水問題・消防問題・衛生問題・交通問題の解決を前提として，浚渫や開拓，場合によっては埋め立ても視野に入れた計画がなされた。

旧城内の主な水路は，南北方向に4本の直河，東西方向に3本の横河が流れているが，民国期には，第二直河が民国17（1928）年と民国31（1942）年に順次埋め立てられている。また，民国20（1931）年には，宋代平江府址の西側に南北方向に流れていた祝家橋から夏侯橋までの水路が埋め立てられ，東側の油橋から蘇家橋までの水路も埋め立てられた。他に，旧城内西北の宝林寺前の短い水路も埋め立てられているが，やはり水路の大規模な埋め立ては数例に過ぎず，民国期は主に既存の水路を整備して衛生状態を改善することが優先されていたと見られる。

3) 公園

公園の設置については，都市生活者の心身の疲れを解消するものとして重要視され，大公園・中公園・小公園・公園道の4項目に分けて計画された。大公園は，古跡公園として文廟と滄浪亭の周辺に，原野公園として旧城外の虎邱に計画された。中公園は，実用公園として旧城内の中央にある宋代平江府址・北部の北寺塔周辺・南部の南園周辺の3カ所に計画されている。小公園は，近隣公園・児童遊園・広場の設置が計画された。近隣公園は半径500mごとに設置，児童遊園は250mごとの設置で子供用の運動機器を設置するという規定もあった。公園道は，散歩道と自転車用道路が計画された。小公園と公園道の設置場所は『工務計画』の時点では未決定で，今後の課題とされていた。

4) 野菜市場

計画当時，旧城内には20カ所，旧城外には6カ所の菜市が開かれていた。菜市のほとんどは，売り手が担いできた天秤棒の籃を並べて商売するものであったため，『工務計画』では，菜市が並ぶ距離や販売量を調べて収容量を割り出し，菜市の付近に公共の臨時野菜市場を建設して，全てを収容しようとした。市場の建物は，露天式のような屋根の無いもので，地面は磚や石を敷き詰め，掃除の排水のために溝が設けられた。また，場内は野菜と魚介の2つの部門に分けられている。居住者の密集度に応じて市場を設置し，周辺の交通の便の改善にも努めている。

5) 建築物

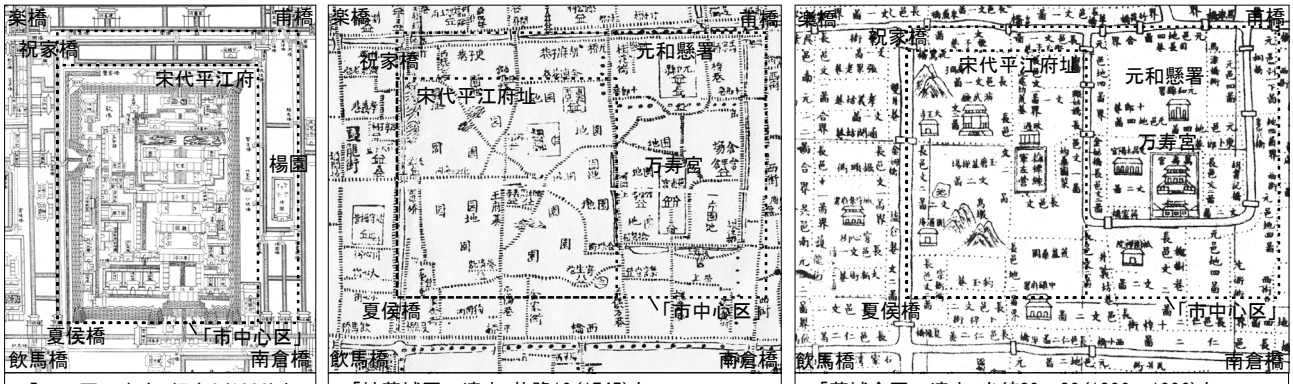
壊れて朽ち果てる状況にある伝統的な建物について，構造や防災の面で危険があること，通気・採光・防温・防湿の面で衛生上弊害があること，美観に注意を払わないため経済的にも精神的にも損失であることなど，問題点を指摘し，改善方法を制定して指導を行っている。

4 民国期の「市中心区」の復原的考察

『仮定路線図』で設定された「市中心区」がどのように計画・実施されたのかを考察していく。残念ながら，計画の詳細が分かる関係史料が現在のところ見当たらないため，地方志などの文字・地図史料や現地調査をもとに考察する[12]。「市中心区」は，国家体制が変わった国民政府下における地方行政の中心区に位置づけられ，概ね甫橋・南倉橋・夏侯橋・祝家橋で囲われた範囲となる。

（1）清末までの「市中心区」

この地区内の西側は，春秋戦国時代に呉国の子城が置かれたのを始めに，宋代には平江府が置かれ，元代末期まで蘇州における政治の中心であった（図－3）。明代になると



「平江図」南宋，紹定6(1229)年
平江府を大きく描いており，縮尺は整合していない。

「姑蘇城図」清中，乾隆10(1745)年
宋代平江府址や万寿宮の周辺は「園地」となっている。東側水路内に元和縣署が置かれている。

「蘇城全図」清末，光緒29～32(1896～1906)年
宋代平江府址には「園地」と記載されていないが，山と池が描かれ，空地も見受けられる。

図－3 清末までの「市中心区」[13]

城内西南に蘇州府が移設され，清代には城内西南の明代の蘇州府とは異なる場所に移設されたため，明以後の政治の中心は随時変更されていた。清代中期乾隆時の『姑蘇城図』を見ると，未だ園地が多く，明以後この地区の開発は行われなかったことが見て取れる。清末光緒年間の『蘇城全図』でも山や池が描かれ，空地も見受けられるため清末に至ってもほぼ変化が無かったと推定される。

一方で東側は，宋代には楊園という邸宅が存在したが，後の清康熙 56（1717）年には万寿宮が創建されている。また，東側には元和懸署が新設されており，乾隆時の地図ではこの周辺にも園地の記載がある。このように，西側も東側も園地の中にわずかな施設が設置されていたに過ぎなかった。また，水路は宋代より改変されることなく清末まで維持されており，橋にも変化は見受けられない。

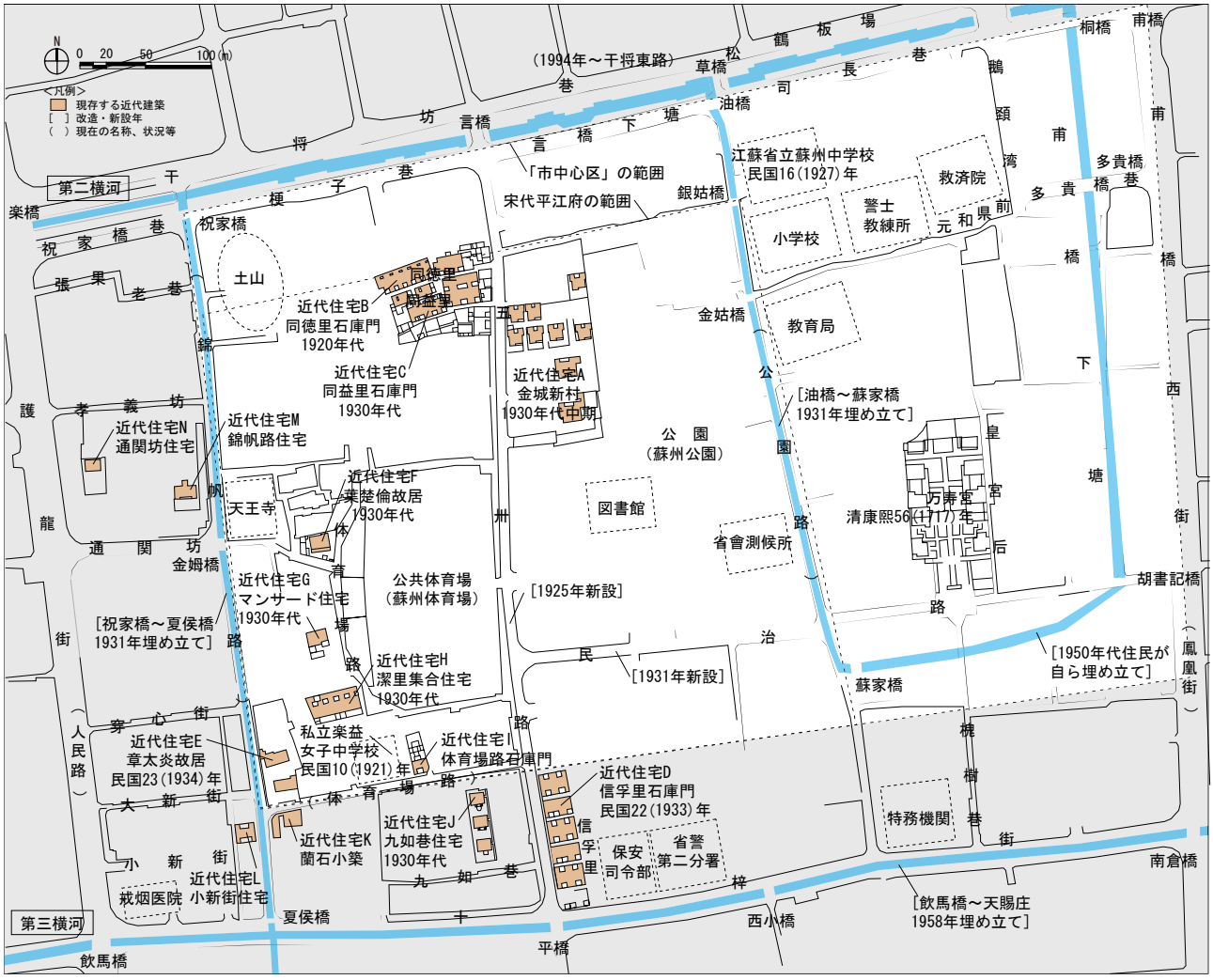
（2）交通インフラの改造

3 章でも述べた通り，「市中心区」内の交通インフラは民国 20（1931）年に大きく改造・新設されている（図−4）。まず，祝家橋から夏侯橋までの水路を埋め立てて錦帆路が新設され，油橋から蘇家橋までの水路を埋め立てて公園路が新設された。他に，東西方向の民治路も同年に新設されている。こうして，明代より手つかずであった宋代平江府址地は，「市中心区」形成に向けて基盤が整えられていった。

その後，蘇家橋から胡書記橋・多貴橋・桐橋までの水路が，1950 年代に住民らによって埋め立てられており，これは後に道路が新設されることなく，街区の中に取り込まれていった。また，建国後の 1958 年には，十梓街の飲馬橋から西へ天賜庄の入口までの水路が埋め立てられており，増加する車の通行に支障のないよう道路幅が拡張された。

他に，小規模な道路の整備や新設も実施されており，公園や体育場に接続する道路の新設，近代住宅の建設に伴う路地の形成，従来の路地の整備などが見受けられる。

道路名称に着目してみると，「市中心区」内の道路には近現代の社会背景にちなむ名称がいくつかあることに気づく。五卅路は，民国 14（1925）年 5 月 30 日に上海で起きた「五卅惨案」と呼ばれる労働者弾圧事件を発端に全国で反帝国主義運動が起こり，同年 6 月 30 日には蘇州でも体育場で追悼集会が開かれたため，王廃基から改称されたものである。他に，民治路は辛亥革命を記念して命名されたもので，公園路や体育場路は隣接施設にちなむ名称である。他地区に比べると，近現代にちなむ道路名称が多く，この点からも



図−4 民国期「市中心区」の復原図 (14)

民国期に集中して改造されたことが明らかである。

（3）政府機関の設置

民国期の蘇州は，清代まで置かれていた3つの懸が呉懸に包括されており，清代の蘇州府署を再利用して呉懸懸政府が設置された。これにより，3カ所に分置されていた懸政府は廃止され，それぞれ他の用途に使用されることとなった。『工務計画』では，「市中心区」を行政の中心区に設定したが，主たる政府機関は設置されなかったのである。

地方志や古地図によると，この地区に設置された政府関連施設は非常に少なく，公園路の東側に設置された教育局と，公園内に設置された気象関連の省立測候所のみとみられる。他に，古地図には警士教練所・省警察第二分署・保安司令部・特務機関が記載されており，警察関係の機関が多い点は特徴的である。

（4）公共施設の設置

「市中心区」の中心的な開発は，政府関連施設よりも公園や体育場などの公共施設の設置である。公園は，民国9（1920）年から7年の年月を費やして造成された。当初，園内には図書館が設置されていたが，民国末に日本軍によって空爆を受けて焼失し，その後人民路に移設されている。体育場は，民国7（1918）年に造成され，敷地面積は当初12,000㎡であったが，1951年に30,000㎡に拡張され，次第に設備が整えられていった。これらは，現在でも蘇州公園や蘇州体育場として利用されている。

他に，学校も設置されている。公園路には，清光緒33（1907）年設立の蘇州公立第一中学堂をもとに，民国1（1912）年に呉懸懸立第二中学校への改組を経て，民国16（1927）年に江蘇省立蘇州中学校が設立された。その南側には，古地図によって城中小学・模範小学と名称が異なるが，小学校も設置されている。また，体育場の南には私立の楽益女子中学校が民国10（1921）年に設置されている。

以上より「市中心区」は，『工務計画』で目指した行政地区というより，近代的な文教地区に改変されたと言えよう。

5 現存遺構にみる民間の住宅地開発

（1）「市中心区」内の住宅地開発

民国期の「市中心区」には，公的な施設以外に，住宅が多く建設されている。現地調査[15]によって，この地区内には近代住宅の遺構が多数存在していることが判明し，その建設時期は民国20（1931）年に道路が整備された後の1930年代中期に集中していることが分かった（表－1）。

住宅開発の主体は，個人による事例が多く見られる。この地区は国民党の支持者が活動したとされ，民主革命家の章太炎は住宅とともに章氏国学講習会を建設し，多くの支持者が集まった。他の個人住宅は，個人名が特定できない事例が多く，居住者に対するヒアリングによると「国民党の支持者が建設した住宅で，国民党が敗北した後は台湾に逃亡・移住した」という聞き取り結果が複数得られた。他に，同徳里石庫門や同益里石庫門などは，富裕な役人や投資家が個人的に集合住宅を建設して賃貸住宅にしていたという開発事例があった。個人以外では，銀行が主体となる開発事例が2例あった。金城新村は金城銀行が高級職員の社宅に，信孚里石庫門は信孚銀行が職員の社宅のために建設したものである。金城新村は洋館形式，信孚里石庫門は里弄形式と，建築形式は異なるが，従業員用に住居を提供する福利厚生の考えが整っていたことが窺える。

建築形式は，主に里弄形式と洋館形式に大別される。

里弄形式は，数タイプの間取りを複数集合させる方式で，例えば信孚里石庫門は三合院型が2戸並列する建物を3棟，L字型が3戸並列する建物を3棟構成しており，合計で15戸の住戸が用意されている。同徳里・同益里は，L字型・I字型の集合であった。いずれも1920～30年代に建設されたもので，同時期の上海の里弄にも類似する簡素な形式である。

洋館形式は，西洋から直接伝授されたものではなく，上海で見た洋館を模倣して建設されたと思しきものである。特徴としては，概ね建物の間口数が3であり，伝統住宅の間取りを応用しているかのようである。また，正面に列柱廊やバルコニーが用いられる事例が多く見受けられたのが特徴的であり，

表－1 「市中心区」周辺の住宅地開発の事例 [16]

符号	名称	所在	建設年代	建築形式	建築的特徴	開発経緯
A	金城新村	五卅路	1930年代中期	洋館/集合	単独の楼房が10棟。構造は磚造と木造の混合。	金城銀行の高級職員住宅。
B	同徳里石庫門	五卅路同徳里	1920年代	里弄/集合	石庫門形式の住宅群。	上海の杜月笙が建設して賃貸住宅とした。
C	同益里石庫門	五卅路同益里	1930年代中期	里弄/集合	石庫門形式の住宅群。	国民党政府財政次長の賈士毅が建設して賃貸住宅とした。
D	信孚里石庫門	十梓街五卅路	民国22(1933)	里弄/集合	石庫門形式の住宅群。2戸1棟と3戸1棟が3棟ずつ。	信孚銀行が江蘇省水警第三区区部の土地を購入して建設。
E	章太炎故居	錦帆路	民国23(1934)	洋館/個人	敷地面積約2400㎡，西洋式レンガ造の楼房が2棟。	南部は民主革命家・学者の章太炎の住宅，北部は章氏国学講習会を設置。
F	葉楚傖故居	体育場路	1930年代	洋館/個人	楼房，間口3。南面に列柱廊とバルコニーを有する。	葉楚傖の私宅。
G	マンサード住宅	潔里	1930年代	洋館/個人	楼房，間口3。マンサード屋根で小屋裏部屋を持つ。	日中戦争以前に建設。建設者は戦時中四川省に移住。その後親戚が管理。
H	潔里集合住宅	潔里	1930年代	里弄/集合	9戸並列の集合住宅。楼層で南側に前庭を有する。	ヒアリングより，日本人が建設し，国民党関係者に移譲したとされる。
I	体育場路石庫門	体育場路	(1920-30年代)	里弄/個人	単体の石庫門三合院住宅。磚造と木造の混合。	個人宅。
J	九如巷住宅	九如巷	(1930年代)	洋館/個人	楼房，間口3。同様の形式が3棟。	(不明)
K	蘭石小築	錦帆路	(1930年代)	洋館/個人	楼房，L字型。磚造と木造の混合。	個人宅。
L	小新巷住宅	錦帆路小新巷	(1920-30年代)	洋館/個人	楼房，間口3。磚造と木造の混合。	個人宅。
M	錦帆路住宅	錦帆路通関坊	(1930年代)	洋館/個人	楼房，間口3。磚造と木造の混合。	個人宅。
N	通関坊住宅	通関坊	(1930年代)	洋館/個人	楼房，間口3。磚造と木造の混合。	個人宅。

【表注】1)住宅名称は文化財指定などで名称があるもの以外は筆者による。2)建設年代は文献5)9)11)およびヒアリングによる。( )内は筆者による推定。3)符号は図-4の近代住宅の符号に対応する。

表－2 旧城内の住宅地開発の事例 [17]

符号	名称	所在	建設年代	建築形式	建築的特徴	開発経緯
a	承徳里石庫門	観前街西	民国20(1931)	里弄/集合	楼房、37戸。三合院型・L字型・I字型がある。	慶泰銭庄の葉振民と承徳銀団の出資によって開発された。
b	蒲林巷近代住宅	人民路蒲林巷	民国13(1924)	洋館/個人	磚造と木造の混合。楼房の南面に列柱廊を有する。	弁護士の私邸。
c	蔭廬(遂園)	景徳路	民国23(1934)	洋館/個人	中洋折衷花園式別荘。主楼は三層でバルコニーを有する。	東山葉氏が慕氏花園の西部の跡地を改築したもの。
d	外五徑弄住宅	下塘街	民国25(1936)	洋館/個人	磚造と木造の混合。洋式楼房。南面に列柱廊を有する。	謝氏の別荘。
e	廟堂巷近代住宅	養育巷廟堂巷	民国24(1935)前後	洋館/個人	楼房の南面に列柱廊がありバルコニーを有する。	雷允上国薬店の主人の別荘。
f	平門路集合住宅	平門路	(1930年代)	里弄/集合	楼房の並列。赤色の磚を用いる。	工業系企業の住宅。
g	螺絲浜1号住宅	螺絲浜	(1930年代)	洋館/個人	楼房。切妻屋根が複数交差する。上海の洋館に近しい。	個人宅。
h	螺絲浜並列住宅	螺絲浜	1920-30年代	洋館/個人	楼房。2戸1棟。間口2が並列する。装飾が少ない。	(不明)
i	螺絲浜4号住宅	螺絲浜	1920-30年代	洋館/個人	楼房、間口3。磚造と木造の混合。外壁に漆喰を塗る。	個人宅。
j	望星橋南住宅	望星橋南	1920-30年代	洋館/個人	楼房、間口3。各開口部にアーチの装飾を有する。	個人宅。

【表注】1)住宅名称は文化財指定などで名称があるもの以外は筆者による。2)建設年代は文献5)9)11)およびヒアリングによる。( )内は筆者による推定。

柱や手摺り子の装飾は伝統住宅で用いられる装飾模様と西洋式とを混合させるものが見受けられた。また，上海の洋館では赤い磚が多く用いられるが，蘇州では伝統住宅でも用いられる灰色の磚が多く用いられている。

（2）旧城内における「市中心区」以外の住宅地開発

次に「市中心区」以外でどのように住宅地開発が行われたのか，現存遺構の所在から考察してみる。

遺構が多数存在するのは，東呉大学（現・蘇州大学）周辺であり，東呉大学の米人教員の住宅や，キリスト教の牧師の住宅を始め，いくつかの遺構が存在している。また，旧城内の北部には，工業系の企業の職員住宅が見られ，空地の多かった北部は工場と集合住宅が建設されたようである。他は，旧城内全体に分散している状況であり，個人が個別に建設した事例が諸所に存在する（表－2）。

里弄形式の代表的な例では，観前街にある承徳里石庫門が，慶泰銭庄の葉振民と承徳銀団という金融関係者によって開発された。住戸タイプは，三合院型・L 字型・I 字型があり，計 37 戸が現存している。洋館形式の例では，東呉大学周辺の住宅に，2 戸 1 棟の住宅や，間口ごとの開口部にアーチ形の装飾を持つ住宅，外観に漆喰が塗られた住宅など，個性的な特徴を持つ住宅が見られた。

このように民国期の住宅地開発は，空地の多い場所に集中して開発される傾向があり，従来の伝統的な住宅地を解体して新築するような開発ではなかったことが窺える。

6 おわりに

伝統中国の都市計画に基づいて築かれた都市空間は，1920 年代に国民政府が主導した都市改造計画に準じて，西洋の近代都市計画の手法によって改造されていった。しかし，蘇州のような伝統都市では，近代都市への変貌としての新市街地形成よりも，衰退しつつある既存市街地の改善が最優先された。具体的には，既存道路の整備・拡幅と新規道路の設置，水路の衛生改善や埋め立て，公園や野菜市場の設置，既存建築物の改善などに力が注がれた。その上で，新市街地形成やさらなる市街地拡張などの将来構想も計画したが，その実現は 50 年以上も後となった。

また，『工務計画』で「市中心区」が設定されたが，民国期の行政機関は清代の施設を再利用することとし，空地の多い「市中心区」には都市公園・体育場などの公共施設や，近代教育に基づく学校が新設され，近代的な文教地区になった。これは，予算上の理由以外に，近代社会を象徴する施設建設を優先した思想上の理由も考えられ，中国都市の近代化の思想を知るうえで興味深い事例と言えよう。

民間による住宅地開発は，1930 年代に活発化し，特に空地において続々と近代住宅が建設されていった。住宅地開発は主に個人・銀行などの金融機関・富裕な役人や投資家によるものが多く，建築形式には里弄形式と洋館形式があり，同時期の上海の里弄と類似する点が見受けられた。

伝統的な都市空間から，都市問題の解決を優先した都市改造や近代的な公共性を備えた都市形成という近代都市への変容は，他の伝統都市でも類似した傾向があると推測され，中国近代都市計画史において見過せない特質である。

補注

(1) 例えば，上海に関して，村松伸（1991），「上海・都市と建築 1842-1949」，パルコ出版など。旧満州に関して，越沢明（1988），「満州国の都市計画―東京の現在と未来を問う」，日本経済評論社，西澤泰彦（1996），「「満州」都市物語―ハルビン・大連・瀋陽・長春」，河出書房新社など。

(2) 『周礼』「考工記」の規範には，「匠人営国，方九里，旁三門，国中九経九緯，経余九軌，左祖右社，面朝後市，市朝一夫」とあり，城の造営は，方形で周囲 9 里とし，それぞれの辺に門を 3 つずつ設け，南北に 9 本と東西に 9 本の道を通し，それぞれの道の幅は 9 軌の車の轍ができる広さにする。東に祖廟，西に社稷を配置し，南に政治の場，北に市場を配置し，市場と政治の場は合わせて一夫（面積の単位）とする，とある。文献 1)や文献 2)によれば，これに合致するものは元の大都しかないとされ，多くの都市はこれに則るものの不一致な点が多い。

(3) 文献 3)および文献 4)を参照。

(4) 文献 5)第一冊第四巻人口を参考にしており，数値は蘇州府城内に懸置した呉懸・長洲懸・元和懸に在住する戸籍数の合計であり，これには各懸が管轄する旧城外の戸籍数も含まれる。

(5) 文献 6)に記される寺観・公署・文廟などの中に，咸豊 10（1860）年に破壊・焼失し，同治年間に修復や再建という記述が多く見受けられる。

(6) 文献 7)を参照。また，適宜文献 8)も参考にした。

(7) 図は文献 7)より転載。活字は筆者による。

(8) 文献 5)をはじめ中国側の史料には，蘇州への日本軍の空爆はこれ以外にも複数回あると記される。

(9) 図は文献 7)より転載。活字は筆者による。実施状況は文献 9)より把握。

(10) 実施状況は文献 9)をもとに分析。以下，3 章 2 項において同様。

(11) 観前街の西，郡廟前・申衙前・黄鶴坊橋弄を拡幅し，景徳路に改称。

(12) 本章の分析には，文献 5)および文献 9)の文字史料，文献 10)所収の古地図をもとに復原的に考察した。民国期の遺構は現地実測調査と文献 11)をもとに考察した。

(13) 図は文献 10)所収の「平江図」（1229（南宋. 紹定 2），「姑蘇城図」（1745（清. 乾隆 10），「蘇城全図」（1896-1906（清. 光緒 29−光緒 32）より部分転載。活字は筆者による。

(14) 図は現在の航空写真と現地調査，文献 10）所収の古地図をもとに復原的に作成した。民国期の遺構は現地実測調査と文献 11）をもとに作成した。古地図については，文献 10）所収の「蘇州府城之図」（1913-1917（民国 2-6）），「新測蘇州城廂明細全図」（1914（民国 3）），「最新蘇州城廂明細全図」（1921（民国 10）），「最新蘇州市全図」（1927（民国 16）），「蘇州新地図」（1931（民国 20）），「最新蘇州地図」（1938（民国 27）），「呉県城廂図」（1940（民国 29）），「最近蘇州遊覧地図」（1943（民国 32）），「最新蘇州地図」（1949（中華人民共和国 1））を用いている。

(15) 現地調査は，2007 年 6 月に近代建築の悉皆調査を行い，11 月に実測調査とヒアリング調査を実施した。

(16) 表は，文献 5）・文献 9）・文献 11）を参考にしつつ，現地での実測調査とヒアリング調査をもとに作成した。

(17) 前掲補注(16)に同じ。

参考・引用文献

1) 都市史図集編集委員会（1999），「都市史図集」，彰国社
2) 斯波義信（2002），「中国都市史」，東京大学出版会
3) 伊原弘（1979），「唐宋時代の浙西における都市の変遷―宋平江図解読作業」，『中央大学文学部紀要史学科 24 号』
4) 高村雅彦（2000），「中国江南の都市とくらし―水のまちの環境形成」，山川出版社
5) 蘇州市地方志編纂委員会（1995），「蘇州市志」，江蘇人民出版社
6) 曹允源・李根源（1933），「民國呉縣志」，（刊行本，王華寶 責任編纂（1991），『中国地方志集成江蘇府縣志輯 11 民國呉縣志』，江蘇古籍出版社）。
7) 陆启东（1989），「一九二七年苏州城建规划与实施」，苏州市地方志编辑委员会・苏州室档案局・政协苏州市委员会文史编辑室编（1989），『苏州史志资料选辑』，总第 11・12 辑合作，pp121-148，苏州市地方志编辑部
8) 陈泳（2006），「城市空间 形态,累型与意义―苏州古城结构形态演化研究」，东南大学出版社
9) 江洪・朱子南・叶万忠・唐文（1999），「苏州词典」，苏州大学出版社
10) 張英霖（2004），「蘇州古城地図」，古呉軒出版社
11) 苏州市文物局・苏州市规划局编制（2004），「苏州文物保护单位保护范围及建筑控制地带图录(古城区分册)」（蘇州市図書館所蔵）